

KONA誌の歴史とその国際的役割

History and International Role of the Journal KONA

江見 準

Hitoshi EMI, Dr.

ホソカワ粉体工学振興財団 常務理事

Hosokawa Powder Technology Foundation, Executive Director

ホソカワミクロンという一企業が、“KONA”という粉体工学に特化した学術誌を23年前に発刊した当初から、国際的に高い評価を保ちつづけているケースは極めて稀である。ここでは、“KONA”誌発刊までのいきさつ、つまり、どのような経緯をたどって今日に至り、さらに現在、どのような評価を得ているかについて、これまで“KONA”誌を支えてきた先人たちの記録と、インパクトファクターで有名な Thomson Scientific のデータベースを基に振り返ってみる。

1. KONA誌誕生に至るまでの経緯と背景

KONA 誌がどんな雑誌かを把握するには、発刊に至るまでの経緯を知っておくと分かりやすい。それは、表1に示すように、先代社長、細川栄一氏の時代に遡る。先代社長が、昭和32年に紫綬褒章を受賞され

たのを記念して、同年「粉碎」誌が発刊された。この名前は、同氏が当時としては画期的なミクロンミルを開発されたことにちなんだ名前と推察される。なお、「粉碎」誌は今年50年記念号が発刊される。その翌年の昭和33年の「細川粉体工学研究所」（大阪工場内）設立を機に、社内報的な性格から、専門学術誌の性格の雑誌に改められ今日に至っている。

きわめて早い時期での「粉体工学研究所」の設立は、先代社長と細川益男現社長（当時専務）の粉体工学に対する並々ならぬ熱意の表れであり、これが昭和43年の、枚方工場敷地内の「細川粉体工学研究所」建設へと受け継がれていく。この研究所は、通常の企業の研究所と違って、単なる製品開発だけでなく、粉体工学に関する基礎研究をも重視したもので、京都大学から最高顧問として招いた亀井三郎教授を始め、学の有力メンバーが顔を揃えた。竣工披露行事は行わ

表1 KONA 誌誕生まで（年譜）

年	事 項
1957(S32)	「粉碎」誌発刊（先代社長細川栄一氏、紫綬褒章受賞記念）
1958(S33)	「細川粉体工学研究所」（大阪工場内）設立 「粉碎」の編集方針を社内報から専門学術誌へ転換
1968(S43)	枚方工場敷地内に「細川粉体工学研究所」建設 「粉体に関する講演討論会」開催（80名）好評
1969(S44)	3月、「粉体技術談話会」発足（会長、中川有三京大名誉教授）講演討論会を企画 5月、「第2回講演討論会」開催（300名）枚方工場竣工記念行事の一環、 12月に第3回、以後、毎年開催
1972(S47)	「粉碎」誌編集委員会発足 委員長：矢野武夫、委員：中川有三、吉田哲夫、井伊谷鋼一、吉岡直哉の各氏
1976(S51)	ホソカワインターナショナル設立
1980(S55)	神保元二氏、狩野武氏、編集委員就任
1982(S57)	談話会会長、吉田哲夫氏就任
1983(S58)	9月KONA誌No.1発刊、粉体技術談話会がKONA誌の編集を担当
1984(S59)	荒川正文氏、向阪保雄氏、宮南啓氏、委員就任

れなかったが、その代わりに、記念に「粉体工学に関する講演討論会」が開催された。これが予想外の好評で、毎年開いて欲しいとの要望が強く、この講演討論会を企画するための「粉体技術談話会」が翌昭和44年に京大名誉教授中川有三氏を初代会長として設立された。講演討論会は、その後、年に一回の割合で開かれ、毎年200人を超える盛況で、今年で40回目を迎える。

粉体技術談話会は、著名な大学教授を中心とした組織であり、昭和47年からは、「粉碎」誌の編集にも関与し、「講演討論会」の企画と共に、その後も重要な役割を果たしてきた。

このように、細川社長は細川粉体工学研究所を中心に、国内での粉体工学の振興に努める一方で、「世界粉体技術連邦」の構想の下に、欧米諸国に粉体技術の拠点づくりに奔走し、昭和51年には「ホソカワインターナショナル」を設立している。

2. KONA誌の発刊

上述のことから、細川社長及びそのグループは、企業内に留まることなく、物心両面からの学へのサポー

トを通じて、日本の粉体工学の発展に寄与しただけでなく、日本がリーダーシップを取って、世界の粉体技術レベルの向上を目指していたことが伺える。世界へ進出するためには、日本の学術レベルを外国の研究者技術者に知ってもらう必要があったが、粉体工学会誌を始めとする日本の学会誌は、当時はほとんど和文誌のみで、外国人にはほとんど読まれていなかったきらいがある。このような状況の中で、粉体技術談話会は、従来の「講演討論会」の企画のほかに、日本の粉体工学の現況を広く全世界に発信することを目的とした、国際学術誌「KONA」を毎年発行することにし、主として、和文誌の中から、粉体に関する優れた日本語論文を英訳して転載することを決めた。粉体技術談話会のメンバー8名に細川社長、横山藤平研究所長が加わり、編集委員会を構成し、創刊号が1983年9月に発行された。表2に、以後今日に至るまでの論文種別ごとの掲載論文数、総ページ数などが記されている。最初の3号までは、日本の第1人者による、これまでの研究成果のまとめが主体となっている。4号から8号までは、主として粉体工学会誌の中から選ばれた優れた研究論文が掲載された。発刊当初は、総ページ数は100ページ前後で、500部印刷し、全世界の有力な研

表2 KONA誌の変遷

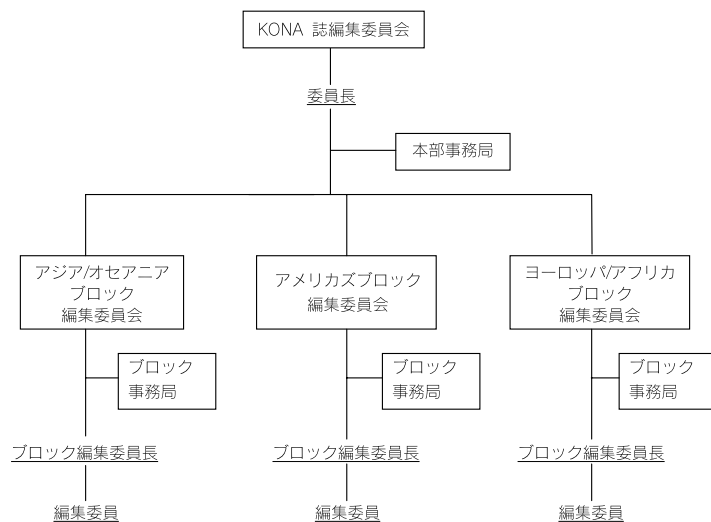
No.	発行年	編集委員長	研究論文	翻訳論文	レビュー論文	総論文数	ページ数	備考
1	'83(S58)	吉岡直哉	8	0	3	11	100	
2	'84(S59)	〃	9	0	1	10	90	
3	'85(S60)	〃	7	0	3	10	88	
4	'86(S61)	〃	0	10	2	12	118	
5	'87(S62)	〃	0	6	4	10	88	
6	'88(S63)	〃	0	9	2	11	114	
7	'89(H01)	神保元二	1	12	2	15	130	
8	'90(H02)	〃	8	9	2	19	166	3ブロック編集体制
9	'91(H03)	宮南 啓	5	9	8(6)	22	242	財団設立
10	'92(H04)	〃	6(4)	7	6(6)	19	202	
11	'93(H05)	〃	6(6)	7	8(7)	21	240	
12	'94(H06)	〃	8(8)	8	6(5)	22	192	
13	'95(H07)	〃	9(9)	8	5(3)	22	249	
14	'96(H08)	〃	4(4)	5	12(11)	21	200	
15	'97(H09)	〃	8(8)	7	9(8)	24	254	
16	'98(H10)	〃	9(9)	4	8(6)	21	254	
17	'99(H11)	〃	9(9)	6	9(6)	24	250	
18	'00(H12)	向阪保雄	15(15)	7	3(1)	25	248	
19	'01(H13)	〃	9(9)	7	7(6)	23	283	
20	'02(H14)	〃	12(12)	6	5(3)	23	276	
21	'03(H15)	辻 裕	13(13)	6	2(1)	21	246	電子ジャーナル化
22	'04(H16)	〃	8(8)	5	3(2)	16	211	
23	'05(H17)	〃	8(8)	5	5(4)	18	224	Web of Scienceへ申請

(註) 表中()内は外国からの論文数

究者や図書館に無料で配布されたが、反響が大きく、購読希望者が増え、間もなく発行部数を1500部に増やした。これらの経費は全てホソカワミクロン(株)によって賄われた。

読者数が増えるにつれ、読者の間から、特に外国人読者の間で、日本人研究者の翻訳論文だけでは不十分であるとの声が強くなり、さらに外国人研究者からの投稿希望が寄せられるようになった。このような動きに対し、1989年(平成元年)9月、粉体技術談話会(吉岡直哉会長)とKONA誌編集委員会(神保元二委員長)は、従来の編集方針を転換し、World-wideに日本を含む世界各国の優れたオリジナル論文を掲載するという新しい方針を打ち出した。その背景には、日本では、すでに化学工学会、機械学会などは、すでに英文誌を発行しており、また、これまで転載の最も多かった粉体工学会誌を発行している粉体工学会もこの年より英文誌(Advanced Particle Technology)を発行する予定になっており、当初の刊行の趣旨が薄れてきていること、さらに、「ホソカワインターナショナル」のアメリカおよびヨーロッパブロックからも、日本以外の国からの投稿の要望が強かったこと、などが挙げられる。KONA誌編集委員会は、この新しい編集方針の下、組織としては表3に示すように、アジア、アメリカ、ヨーロッパの3ブロックにあるホソカワミクロンの拠点に、それぞれ編集委員会、事務局を設けることにした。各ブロック編集委員会は、独自に投稿原稿の受付、論文の査読と選定を行うことが保障され、集約された論文の掲載については、責任を持ってKONA誌編集委員会があたることになった。

表3 KONA誌編集委員会組織



1990年、新しい編集体制の下でのKONA誌No. 8が発行された。この年、第2回World Congress Particle Technologyが全世界から700人を集めて京都で開かれた。この会期中にホソカワミクロンがスポンサーとなって催されたセレモニーで、KONA Awardが細川社長からCampbell教授に授与されたことにより、“KONA”という言葉が全世界に知れ渡ることになった。

翌1991年(平成3年)12月、ホソカワ粉体工学振興財団が設立され、KONA誌の編集業務は粉体技術談話会から財団へ移行し、自主事業として製作、発行の業務を引き継ぐことになった。3ブロック制が確立された以降は、1ブロックあたり6~8件、ほぼ均等割りりで、表2に示すように、オリジナルな研究論文、翻訳論文、レビューと、全世界から集められたバラエティに富んだ構成を保ち、今日に至っている。配布部数は当初の500部から2000部に増やしていたが、2003年の電子ジャーナル化に伴い、財団のホームページから誰でも読めるようにし、印刷部数も700部に減らした。しかし、紙媒体での要望も根強かったため、今年から1000部に復活し、しばらく様子を見ることにしている。

さらに、かねてから外国の編集委員や著者からの要望が強かったWeb of Scienceへの収録雑誌入りを目指して、Thomson社へ登録申請を行った。この審査は、最新号およびこれ以降に続けて発行される二つの号を対象として、雑誌のポリシー、スタイル、論文の被引用状況など総合的に判断して採否が決定される。したがって、向こう2年間の論文の質が問われることになる。採択率は10%未満と言われている。

3. 国際的評価

KONA誌は国際的に高い評価を受けているとよく言われるが、これにはかなりの客観的根拠がある。一つは、3ブロック共に、世界的に高い評価を受けた実績のある著名な大学教授が編集委員のメンバーであり、レベルの高い論文が集まりやすいこと、二つ目は、各ブロックとも割り当て論文数が7~8編と限られており、掲載にこぎつけるまでにはかなりの狭き門となり、査読による採択率は1/2を切っている。さらに、アジアブロックの英訳転載論文も粉体工学会誌の場合、査読にパスして和文で掲載された論文の中からさらに同誌編集委員会が優れた

表4 KONA誌掲載論文の被引用回数

データ典拠: Web of Scienceデータベース (トムソンサイエンティフィック社提供)

No.	Citation number	author	nation	vol	year	page	category	subject
1	40	Thornton,C.	UK	15	1997	81	Review	Granular media
2	28	Tsuji,Y.	JPN	3	1985	38	Original	Simulation
3	26	Yokoyama, T.	JPN	5	1987	59	Review	Mechano-fusion
4	25	Dunbar, C.A.	USA	16	1998	7	Review	Dry powder aerosol
5	24	Mishura, B.K.	USA	8	1990	92	Original	Tumbling mill, DEM
6	20	Giddings,J.C.	USA	9	1991	200	Review	Characterization
7	15	Hounslow, M.	UK	16	1998	179	Original	Population balance
8	11	Muller,E.	GER	13	1995	79	Original	Characterization
9	11	Kwade, A.	GER	15	1997	91	Review	Wet comminution
10	8	Kalman, H.	ISR	18	2000	108	Original	Breakage and attrition
11	8	Mort, P.R.	USA	17	1999	64	Review	Agglomeration
12	8	Sommerfeld, M.	GER	16	1998	194	Original	Simulation
13	8	Chikazawa, M.	JPN	2	1984	54	Original	Adhesion
14	7	Tomas, J.	GER	18	2000	157	Original	Adhesion and consolidation
15	6	Mizuno,M.	JPN	9	1991	19	Translated	Packing
16	6	Otani,Y.	JPN	11	1993	207	Translated	Electret filter
17	6	Schoeman, B.J.	SWE	15	1997	150	Original	Colloidal suspension
18	6	Forster, R.N.	UK	18	2000	139	Original	PET
19	5	Gutsch,A.	GER	20	2002	24	Review	Nanoparticle
20	5	Bustami, R.T.	AUS	19	2001	57	Review	Supercritical fluid
21	5	Concha, F.	CHL	11	1993	79	Review	Thickener
22	5	Hogg, R.	USA	18	2000	9	Review	Fine grinding

論文として高い評価を与えた論文で、それらを含めた数多くの論文から、本誌アジアブロックの編集委員会が精選していること、などが挙げられる。

しかし、これらは事実としても、具体的なデータがない以上説得力がないという意見もあるだろう。そこで、この度、トムソンサイエンティフィックのご好意で、2005年までのKONA誌に掲載された論文の被引用状況を調べていただいた。全部で44件が何らかの雑誌の著者に引用されていたが、うち、5回以上引用されたものを整理して表4に示した。これを見るとレビュー論文が多く引用されていることが分かる。さらに、ここには掲載していないが、本誌の論文を最も多く引用している雑誌は、Powder Technology誌で、全体の引用件数の10%以上を占め、また国別では、米国と日本が圧倒的に多いこともわかった。このデータは、他のどの雑誌にどれだけ引用されているかを示したただけのものであり、これだけでKONA誌の国際的評価を論ずるのは危険であるが、日本で発行されている他の多くの学会誌と比べて、学会誌でないにもかかわらず、一企業の財政的、人的援助により、粉体工学の分野で、世界の学術誌として着実な地歩を築いてい

ることに疑いを挟む余地がない。

以上、KONA誌誕生のいきさつから国際的評価まで、独断と偏見で整理してみたが、昔の資料を辿ってみて、ここに至るまでに、私たちから見ると恩師の先生方やKONA誌の国際化に奔走してくださった沢村さん、佐藤さんほか多くの方々、裏方で支えてくださった谷口、中川両財団元事務局長、河村現局長の努力に頭が下がる思いである。それにも増して、細川社長をはじめとするホソカワグループの粉体工学にかける情熱に、心から拍手を送りたい。

Caption

Table 1 Chronology before the publication of KONA

Table 2 History of KONA

Table 3 Organization of KONA editorial board

Table 4 Citation number of the papers from KONA

(data from Web of Science database (Thomson Scientific))